

祭神三座 有馬神社公智神社 湯泉神社神社 當山地主權現也、凡寺社多南向、當社北向也、

〔延喜式神名〕攝津國

有馬郡三座 湯泉神社大月次新嘗

〔有馬日記〕湯の大神にまうづ所は温泉より一丁ばかり東南にて、いさ、か高くのぼる所、南の山のそばに、なん、北にむかひてた、せ給へる、あたはらといふやまひに、としごろなやむよしまうして、此やまひやめ給へ、御湯のゑるしあらせ給へと、ねんごろにねぎまうして、こ、につきける日よりはじめて、朝ごとにまうでぬ日なし、そもく此大神、今は權現の宮と里人は申す、さるは熊野權現、三輪明神、鹿舌明神と申て、三柱をまつれるよしいひつたふ、千載集には、有馬の湯に忍びて御幸ありける御供に侍りける、湯の明神を三輪のみやう神となん申侍ると聞て、物にかきつけて侍りける、按察使資賢、めづらしき御ゆきをみわの神ならばゑるしありまのいでゆなるべし、となんあれば、むわとは大汝命をまつれるなるべし、藥の神にましく、て、人の病をたすけ給ふときけば、ことにたのもし、延喜式の神名帳に、湯泉神社とゑるされたるは、これなるべし、安永二年といひしとし、此わたり寺また人の家ども、そこらやけぬるをり、此御社もやけ給ひぬとて、今はかり殿になんおはします、此東の今一きは高くて平らかなる所は、藥師の御堂の跡なりとて、竹の垣をゆひめぐらしたるに、たくみどもあまたして、大きなるくれざいもくほどくとうちけづるなり、本尊は、今は御社のむかひなる何がしの坊におき奉れると、いと尊くきらきらと大きなる御ほとけなり、此佛のたふときこと、又出湯の深きゆるよし、なんと、此坊につたへて、物にしるしたる、いにしへ大水いで來て、山くづれたるに、湯のあたりも何もうせはて、年ころへけるに、行基ぼさつといふ法師、すぎやうにありくをりふし、熊野權現といふ神に出あひ奉りて、尊き御さとしごとうけ給はりて、衆生のやまひをすくはんためにたづね來てなん、此御湯